

果たして少年の予想は当たっていた。

「ひああッ！！♡♡♡」

尻を裂かんばかりの、重い衝撃。

少年の耳朶を、背後の男の凝らした息が打つ。

「あ”あ…ッ！♡ん”……っ♡く、あ、……ッ♡♡」

背後の男の雄茎までも孔にねじ込まれながら、目もくらむ圧迫感に、目の前の男の首にすがりつく。

二本の太い雄茎に、孔がこのまま壊れてしまいそうに開け広げられている。それなのに、潤いすぎた少年の孔は痛みをまったく拾わず、むしろ腹底から、怖いほどの悦楽がこみ上げてくる。

「あっ♡ああッ、！♡♡♡」

既に一本の男根を咥えこんでいる狭い孔内を、ずっ、ずっ、と腰を揺さぶるようにして小刻みに進まれる。そのたびに、視界に星が散るほどの快感が脳天にぶちあがり、少年の四肢は感覚もなくなるほどに甘く痺れた。

「……あ♡……あ♡、苦し……っ、♡」

このまま口から二人のものが出そうな錯覚すら覚えながら、しかしその苦しさは充足感にも繋がっている。

村の危険がまだちらちらと胸をかすめるのに、今まで以上の悦楽に、目からはぼろぼろと涙がこぼれるほどなのだ。

「ひ♡あ♡♡あぁあ…ッ！♡♡♡」

ず、ず、ずん——ッ

背後の男が立て続けに押し入ってきて、二本の男根はもつれあうようにして少年の奥を穿<sup>うが</sup>った。

どん、と太い雷を打ち上げられた体内が狂おしく燃え立ち、前後もわからぬほどの境地に少年を飛ばす。

その耳元に、少年を犯す二人の男が囁く。

「もっともっと、僕たちと一つになろう……」

「そう。二度と離れはしないように……」

そのとき、強すぎる快樂に霞んだ少年の脳裏に、ある光景が広がった。